

保護者アンケートにみる 幼児の海辺の自然体験活動で大切なこととその実現のための課題

渡部かなえ, 海野義明*

(キーワード) 海辺の自然体験活動, 幼児, センス・オブ・ワンダー

1. 緒言

ジェームス・ラブロックは、地球にガイア（ギリシア神話の大地の女神）という美しい呼び名をつけた¹⁾。生命にとって脅威である紫外線やプラズマ流を噴出している太陽を慈恵に変え、死の世界である宇宙空間でガイアを生命の世界にしているのは、水と大気である。ガイアはその表面の7割以上が水で覆われており、地球というより水球で、海はガイアの主要な部分である。ガイアに人間が行ってきたことが深刻な影響を及ぼしているが、それでもガイアが持ちこたえているのは、海が、人間がもたらしたものに抗して環境をコントロールし、生命が存在できる状況を保っているからである。この海を傷めてしまったら、ガイアを生命が存在できる惑星として維持していくことができなくなってしまう。

持続可能な環境づくりの必要性²⁾、子ども達が未来に続く持続可能性と環境保護にとって重要な存在であること³⁾、自然体験活動や海洋教育の重要性⁴⁾が認識され、海辺の自然体験活動プログラムが民間団体によって実施されるようになり⁵⁾、学校教育への導入も推奨されるようになった⁶⁾。そして、自然体験活動への参加を通して、「子ども達が自然の大切さを学んだ」、「子ども達が自主性や協調性、社会性を身につけた」、「生きる力を育んだ」等の効果が多数報告されているが⁷⁾、そのほとんどは小学生以上を対象としたプログラムで、幼児を対象としたものは少ない。

また、これらの教育効果は、自然体験活動だけでなく、地域社会での活動やボランティア活動などでも報告されており⁸⁾、そもそも学校教育や就学前の教育・保育の目標やめあてにも掲げられていて^{9), 10), 11)}、学外・園外での特別な体験活動ではない通常の教育や保育でもその実現を目指した指導・支援が行われている。

さらに、自然の中で様々な体験をした子どもがどのような人に育っていくのか、幼児期に自然体験をすることが、その子の人生にとってどのような意味を持ち、人生にどのような影響を及ぼすのかは、何年もたってその子が大人になれば確認はできない。自然体験をしたから、すぐに目に見える効果（教育効果）が現れるわけではない。しかし、子育てに悩む保護者や、成果を要求されがちな最近の保育・教育現場では、性急に結果を求めてしまうことがある。

* NPO 法人オーシャンファミリー海洋自然体験センター

海辺の自然体験プログラムで大事なものは、子ども達が海を楽しみ、海や自然の生き物を好きになることである¹²⁾。好きになれば、仲間として友達として大切な存在になる。「環境を守る」というのはもっと大きくなってから考えることで、幼児期はそこに至る土台となる「海や自然、自然の生き物が好きになる」ことが何よりも大切で、それさえ実現できれば十分なのである。

子ども、特に幼い就学前の幼児の場合、体験活動ができるかどうかは、子ども自身ではなく、保護者の意志によることが多い。保護者が納得し賛同してくれなければ、子ども達は体験活動をすることができない。毎日子どもを育て見守っている保護者は、その子のことを最もよく知っていて、最もよく考えているので、保護者の意向や要望は傾聴すべきである。しかし、わが子の成長を願うばかりに性急に結果を求めてしまったり、自分の子どもしか目に入らなくなってしまうことがある保護者の要望に沿ってさえいれば、それで大切なことが伝えられるとは限らない。幼児のための海辺の自然体験活動プログラム（さざなみ教室：月1回）参加児の保護者と、比較のため海辺の自然体験活動の機会や量が異なるグループに属する子ども達の保護者を対象としてアンケート調査を行い、保護者の期待、保護者の目から見た海辺の自然体験活動への参加を通しての子どもの変化を検証しながら、子ども達に一番大切なことを伝えていくための課題（大人である保護者がどうあるべきか）、を明らかにすることを研究の目的とした。

2. 方法

(1) アンケート調査対象と実施時期

海辺の自然体験活動の機会・量の異なる以下の4グループに属する保護者にアンケートを依頼した。

<さざなみ教室> 子どもが保護者と一緒に海辺の自然体験活動を楽しむ教室。1か月に1回の開催で、各回とも4時間程度のプログラム。主な活動場所は神奈川県の上野海岸。調査年度の参加者児は12名。

<Telacoya921> 園児達が通年に渡ってほぼ毎日、在園時間の半分以上を海辺での活動を中心としたアウトドア活動で過ごしている私立無認可幼稚園。所在地は神奈川県の上野町。

<幼稚園> 文部科学省の設置基準を満たした神奈川県内の私立幼稚園。子どもの在園時間は、平日午前9時～午後2時の1日5時間程度。

<保育園> 厚生労働省の設置基準を満たした神奈川県内の私立保育園。子どもの登園は平日8時半～9時、下園は午後8時半以降で、在園時間は8～9時間程度。土曜日でも登園する場合がある。

アンケートの①配布時期、②回収時期、③回収率は、<さざなみ教室> ①2012年4月と10月、②2012年5月～6月と11月～12月、③100%、<Telacoya921> ①②とも2012年7月と10月、③100%、<幼稚園> ①②とも2012年7月と10月、③約3割、<保育園> ①②とも2012年7月と10月、③約3割、であった。

(2) アンケート調査内容と解析方法

質問内容は、①子どもの日ごろの遊びや屋外での活動や心理・社会性の発達状態、②保護者が子どもと屋外で過ごす機会や子どもと自然や生き物について話したり本を読んだりする機会、③さざなみ教室に期待すること（さざなみ教室参加児以外の保護者には、さざなみ教室のような子どもの海辺の自然体験活動の指導・支援をしている地域や民間の組織に期待すること）、④（さざなみ教室参加児以外の保護者が）幼稚園・保育園に期待すること、であった。アンケート用紙に、さざなみ教室参加児保護者のみ了解を得て子どもの氏名・年齢・性別を記入してもらい、他は無記名（何歳児クラスかと性別のみ記入）とした。回答方法は、選択肢から該当するものの番号を1つ選んで丸をつける択一式を原則とし、時間や日数を問う2問は数値を記入してもらった。全て数値化された回答から、変量、有意差、平均値および相関係数を算出した。また、さざなみ教室参加者は1対1対応のT検定、その他は対応なしのT検定（有意水準5%）を行った。

アンケートの選択肢は、①はい、②どちらかというとはい、③どちらかというといいえ、④いいえ、で、「はい」の回答数が多いほど平均値は1に近くなり、「いいえ」の回答数が多いほど平均値は大きくなる。期待度や満足度も、期待している（満足している）は①、どちらかというと期待している（満足している）は②、どちらかというと期待していない（満足していない）は③、期待していない（満足していない）は④となり、期待値や満足度が高いほど平均値は1に近くなり、期待値や満足度が低いほど平均値は大きくなる。

子どもの1日あたりの外遊びの長さは、1時間を単位とし、「30分」は0.5、「1時間」は1、「90分」は1.5とした。

家族で子どもと野外で過ごす機会は、1週間当たりの日数に換算した。1か月を4週間として、「月4日」は1（週1回）、「月2日」は0.5、「月1日」は0.25とした。また「ほぼ毎日」は6（週6日）とした。「年1日」は、1年間を52週として0.02とした。

なお、文部科学省が実施した調査（体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動のあり方に関する調査研究：平成19～21年）で用いられた「保護者への聞き取り調査（調査3-1）」と同じ内容のアンケートへの回答もあわせて依頼し、グループ間で海辺の自然体験活動以外の生活環境や発育状態に大きな差はないことを確認した。

3. 結果

(1) さざなみ教室参加者で、2回の調査の回答に変化（差）があった項目

表1: 子どもに関する質問		お子さんは自然や自然の生き物に興味・関心を持っていますか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	1.82	7月	1.11	7月	1.42	7月	1.20
11～12月	1.25	10月	1.13	10月	1.58	10月	1.67
有意差	P<0.02 (<0.05)	有意差	無し	有意差	無し	有意差	無し

表2: 子どもに関する質問		お子さんはたくましく育っている方だと思いますか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	2.36	7月	1.22	7月	1.92	7月	1.73
11～12月	1.83	10月	1.23	10月	1.97	10月	1.78
有意差	P<0.04 (<0.05)	有意差	無し	有意差	無し	有意差	無し

(2) 他のグループで、2回の調査の回答に変化(差)があった項目

表3: 子どもに関する質問		お子さんは、お部屋の中で遊ぶより外遊びが好きですか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	1.55	7月	1.33	7月	1.62	7月	1.73
11～12月	1.42	10月	1.25	10月	1.97	10月	2.00
有意差	無し	有意差	無し	有意差	P<0.02 (<0.05)	有意差	無し

表4: 子どもに関する質問		お子さんは毎日どの位の時間を野外(屋外)で過ごしますか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	2.23 時間	7月	2.72 時間	7月	1.80 時間	7月	1.60 時間
11～12月	2.06 時間	10月	3.25 時間	10月	1.17 時間	10月	1.08 時間
有意差	無し	有意差	無し	有意差	P<0.03 (<0.05)	有意差	P≤0.03 (<0.05)

表5:保護者の姿勢・ 行動に関する質問		ご家族でお子さんと、自然や生き物について、よく話したり一緒に本を読んだりしますか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	2.09	7月	1.22	7月	1.96	7月	1.60
11～12月	1.67	10月	1.25	10月	2.04	10月	2.56
有意差	無し	有意差	無し	有意差	無し	有意差	P≤0.02 (<0.05)

表6:保護者の姿勢・ 行動に関する質問		ご家族で、お子さんと一緒に野外で一緒に過ごす機会が多いですか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	1.91	7月	1.44	7月	1.88	7月	2.20
11～12月	2.08	10月	1.75	10月	2.45	10月	2.56
有意差	無し	有意差	無し	有意差	P<0.01 (<0.05)	有意差	無し

表7:保護者の姿勢・ 行動に関する質問		ご家族で、お子さんと野外で一緒に過ごす機会は何日のくらいありますか (回答番号の平均値)					
さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	3.55 日/週	7月	3.67 日/ 週	7月	3.59 日/週	7月	1.55 日/週
11～12月	2.33 日/週	10月	2.63 日/ 週	10月	2.42 日/週	10月	1.43 日/週
有意差	無し	有意差	無し	有意差	P<0.01 (<0.05)	有意差	無し

(3) どのグループも2回の調査に差が無かった項目

水遊びや砂遊び、泥んこ遊びが好き / 自分でできることは自分でやる (やろうとする) / 自分から何かをやろうとする (チャレンジする) / 友達と仲良くできる / 初対面の友達とすぐに仲良くなれる / お手伝いをする (しようとする) / 我慢強い / やり遂げるまで頑張る / 自分の気持ちや考えを相手に伝えられる / 相手の気持ちを思いやる / 情緒が安定している / 自分より小さいこの面倒をみる (みようとする) / ゴミをゴミ箱に捨てる (放置したりポイ捨てしたりしない)

(4) 保護者の認識と実際の時間・回数の一致度

表8: 子どもは室内遊びより外遊びが好きかと実際の外遊びの時間の相関 (相関係数)

さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	2.23時間/日	7月	2.72時間/日	7月	1.60時間/日	7月	1.80時間/日
	0.52 中程度の相関		0.52 中程度の相関		0.38 低い相関		0.07 相関が無い
11～12月	1.99時間/日	10月	3.25時間/日	10月	1.08時間/日	10月	1.17時間/日
	0.35 低い相関		0.72 相関が高い		0.35 低い相関		0.00 相関が無い

表9: 家族で野外で過ごす機会は多いかと実際の機会の相関 (相関係数)

さざなみ教室参加者		Telacoya921		幼稚園		保育園	
5～6月	3.55日/週	7月	3.67日/週	7月	3.59日/週	7月	1.55日/週
11～12月	2.33日/週	10月	2.63日/週	10月	2.42日/週	10月	1.43日/週
有意差	無し	有意差	無し	有意差	P<0.01 (<0.05)	有意差	無し

* 「はい」①の回答が多く、時間の長さや回数に関する回答の数値が大きい場合は、統計処理上では「高い負の相関」となるが、直感的に分かりやすくするため、絶対値をとって「相関が高い」と表記した。同様に、中程度の負の相関は「中程度の相関」、低い負の相関は「相関が低い」とした。相関が無い場合は、そのまま「相関が無い」と表記した。

(5) さざなみ教室や幼稚園・保育園に保護者が期待すること

どのグループも設問全体を通して、「①とても期待している」および「②期待している」の選択が多く、「③それほど期待していない」の選択率は低く、「④期待していない」はほとんど選択されなかったため、各回答の平均値は1.0～1.89と中央値からかなりずれていた。よって1.0以上1.25未満を期待値◎、1.25以上1.50未満を期待値○、1.50以上1.75未満を期待値△、1.75以上を期待値×と分類して比較検討した。

表10

	さざなみ教室参加者	Telacoya921		幼稚園		保育園	
	さざなみ教室に期待 (SZに期待)	SZに期待	園に期待	SZに期待	園に期待	SZに期待	園に期待
1) 自然との触れあい	○	◎	◎	○	△	○	△
2) 新しい友達と仲良くする	△	◎	◎	○	○	○	○
3) 始めてみるもの、初めて経験することを楽しむ	○	◎	◎	○	○	○	◎
4) 自分でできることは自分でやる (やろうとする)	○	◎	◎	○	○	△	○
5) 自分から何かをしようとする (チャレンジする)	○	◎	◎	○	○	△	○

6) やり遂げる体験	◎	◎	◎	○	○	○	○
7) 積極性を身につける	○	◎	◎	○	△	○	△
8) 異年齢交流	△	◎	◎	○	△	△	○
9) 家庭では体験できないことが体験できる	◎	◎	◎	△	○	○	◎
10) 自然や自然の生き物に興味を持つ	○	◎	◎	○	△	○	○
11) 自然を守ることの大切さを理解する	○	◎	◎	△	△	○	△
12) 自然科学に興味を持つ	×	◎	◎	△	×	△	×
13) 自然や科学の知識が豊かになる	×	◎	◎	△	×	△	×

(6) さざなみ教室参加者の，期待（5～6月の回答）と満足度（11～12月の回答）

さざなみ教室に期待することとその満足度を，平均値の変化から検討した。期待値・満足度とも平均値の分類表記は，上記5)の期待値と同様としたが，満足度に1つだけあった2.25という突出した値は××と表記した。

表 11	期待値	満足度
1) 自然とのふれあい	○	○
2) 新しい友達と仲良くする	△	××
3) 始めてみる物，初めて経験することを楽しむ	○	◎
4) 自分でできることは自分でやる（やろうとする）	○	△
5) 自分から何かをしようとする（チャレンジする）	○	△
6) やりとげる体験	◎	△
7) 積極性を身につける	○	×
8) 異年齢交流	△	×
9) 家庭では体験できないことが体験できる	◎	○
10) 自然や自然の生き物に興味を持つ	○	○
11) 自然を守ることの大切さを理解する	○	△
12) 自然科学に興味を持つ	×	×
13) 自然や科学の知識が豊かになる	×	×

4. 考察

(1) 2回の調査に見る変化

さざなみ教室参加児の保護者の「自然とのふれあい」や「自然や自然の生き物に興味を持つ」ことへの期待値および満足度は評価○であり，保護者の期待も満足もそれなりで，「とても期待している」・「とても満足している」ではなかった（表11）。しかし，24項目中2つだけ認められた子ども自身の変化（2回の調査で有意差があった）のうち1つは「お子さんは自然や自然の生き物に興味・関心を持っていますか」であった（表1）。さざなみ教室での海辺の自然体験活動への参加を通して，「海や自然，自然の生き物を好きになる」という一番大切なことを，子ども達はちゃんと受け取ってくれていた。なお，毎日在園時間の半分以上を海辺を中心とした自然体験活動をして過ごしている Telacoya921 の子ども達は，自然や自然の生き物に興味・関心を当初からずっと持っているもので差が無く，幼稚園・保育園の子ども達の自然や自然の生き物への興味・関心は，半年間では特に変わっていなかった。

もう1つのさざなみ教室に参加した子ども自身の変化は「たくましく育っている」で(表2)、「子どもは海で元気になる」¹³⁾が見事に体现されていた。Teracoya921の子ども達は当初からずっと元気でたくましいので差が無く、幼稚園・保育園の子ども達のたくましさは半年間では特に変わらなかった。

さざなみ教室参加児保護者の回答には差(変化)はなかったが、幼稚園・保育園児の保護者の1回目と2回目の回答に差があったのは、子どもが室内遊びより外遊びが好きかどうか(表3)と、子どもが野外で過ごす時間(表4)であった。秋になり気温が低下してきたことが、幼稚園や保育園に通う子ども達の外遊びの時間の減少の理由と思われるが、秋には秋の、冬には冬の、屋外での遊びの面白さや自然や自然の生き物との出会いがある。スウェーデンの森の幼稚園(年間を通して在園時間のほとんどを森などのアウトドアで過ごす就学前保育施設)では、「悪い天気は無い・悪いのは服装や準備」なのだから¹⁴⁾、子ども達は完全な防水・防寒がなされた服装で、雨の日も雪の日も元気に外で遊んでいる。服装やアイテムを工夫して寒さや感染(感冒)を防いで、運動量が少なくなりがちな冬季も元気に外で遊べる工夫を幼稚園・保育園の子ども達の保護者には要望したい。さざなみ教室参加児は初夏に比べると初冬の外遊びの平均時間はやや減少、Telacoya921の子どもは平均時間がやや増加しているが、いずれも統計的な有意差はなく、四季を通して一定の時間は外遊びをすることが定着していると考えられる。

保護者の姿勢・行動で、保育園児の保護者では「ご家族でお子さんと、自然や生き物について、よく話したり一緒に本を読んだりしますか」(表5)が、2回目の調査では「どちらかというといいえ」の回答が有意に増えていた。平日は仕事で忙しく、週末も平日にできない家事などをせねばならないために、子どもと接する時間が短くなりしがちな保育園児の保護者に対して、行政やコミュニティーの支援も、職場の理解も、十分ではない。現状の子育て支援は手当ての支給と子育てに関する相談が主であるが、保護者が、収入減や仕事内容の変更を迫られることなく、子どもと一緒に過ごす時間を持つことができるよう支援することが、就労している保護者への今一番必要な子育て支援であると考えられる。

幼稚園児の保護者では「ご家族で、お子さんと一緒に野外で一緒に過ごす機会が多いですか」(表6)が、2回目の調査では「どちらかというといいえ」の回答が有意に増えており、家族で野外で過ごす時間(表7)も有意に減少していた。子どもの外遊びの時間の減少と家族が子どもと一緒に野外で過ごす時間の減少には関連があると推察される。小中学生とその保護者を対象とした文部科学省の調査で、保護者が運動が好きでスポーツに関心があり積極的に運動やスポーツをする家庭の子どもは運動が好きでスポーツに関心があり積極的に運動やスポーツをする、逆に保護者が運動があまり好きでなかったり運動をしない場合、子どもも運動が好きでなくやらない、ことが明らかになった¹⁵⁾。幼児期に刷り込まれた習慣は生涯に渡って影響を及ぼす。幼稚園児の保護者には、初夏の屋外で過ごしやすい季節だけでなく、年間を通して、子どもと一緒に外で元気に過ごし、子ども達が外遊びの楽しい機会と記憶を持てるようにしてくれることを願う。

(2) 保護者の認識の実際の時間や回数のずれ

「(お子さんは)外遊びが好きですか」という質問と子どもが屋外(野外)で過ごす時間(表

8)、「家族で野外で過ごす機会が多いですか」という質問と、保護者が子どもと一緒に野外で過ごす週あたりの日数(表9)から、保護者の認識と実際の時間や回数的一致度とずれには、グループによって差があった。ほぼ毎日、在園時間の半分以上をアウトドア活動で過ごしている Telacoya921 の子どもの保護者では、どちらの問いも、7月の調査では中程度の相関が、3か月後の10月の調査では高い相関が見られ、保護者が「うちの子は外遊びが好き」と思っている子どもは外遊びの時間が長くなっており、「子どもと野外で過ごす機会が多い」と思っている保護者は実際に子どもと野外で過ごす機会が多く、保護者の認識と実際の時間や回数的一致度は高かった。

さざなみ教室(月1回の活動)参加児の保護者は、子どもの外遊びの時間の長さや保護者の認識の相関は、5～6月の調査では中程度であったが、11～12月の調査では低くなってしまった。また、家族で野外で過ごす機会とその認識の相関は、5～6月の調査では低い相関だったが、11～12月の調査では相関が無かった。これは、保護者が「うちの子は外遊びが好き」と思っている子どもは外遊びの時間が長いとは限らず、「家族で野外で過ごす機会が多い」と思っている子どもは外遊びの時間が長いとは限らず、「家族で野外で過ごす機会が多い」と思っている子どもは外遊びの時間が長いとは限らず、実際にはあまり多くないことを示している。さらに、初回調査に比べて2回目の調査では、どちらの相関も低下しており、この間の4回程度の海辺での活動経験は保護者の認識を高めることには繋がらず、月に1回さざなみ教室に子どもと一緒に参加することで自己満足し、初冬になって子どもと野外で過ごす時間や機会が減っているにもかかわらず「自分は子どもと野外で過ごしている」と思い込んでしまっている可能性がある。さざなみ教室の目的は保護者の自己満足ではなく、保護者自身が子ども達と一緒に自然を楽しめるようになることである。さざなみ教室はあくまできっかけ作りで、保護者には、子どもの心の中に芽生えたセンス・オブ・ワンダー¹⁶⁾を、子どもと共有し子どもと一緒に育てていく存在としての期待がかけられていることをもう少し自覚してもらえることを願う。さざなみ教室参加児保護者の認識と実際の時間・回数とのずれは、幼稚園児の保護者のものとあまり変わらず、子どもの成長(一番大切なものをちゃんと受け取ってくれた)に比べ、保護者の成長はやや残念な結果に終わってしまった。

保育園児の保護者の場合、どちらも相関は無かった(保護者が「うちの子は外遊びが好き」と思っている子どもは外遊びの時間は長いとは限らず、「家族で野外で過ごす機会が多い」と思っている子どもは外遊びの時間は長いとは限らず、実際には多いとは限らない、など)。保護者が、もっと子どもを見ることができ、子どもの状態を把握でき、子どもと一緒に過ごせる時間が持てるよう、子育て支援のあり方を検討する必要があることが、このデータからも言える。

これらの結果から、子ども達の自然体験活動を通しての心と体の健やかな育ちには、子ども自身の経験値はもちろんだが、それだけではなく、保護者の認識や経験が大きな影響を及ぼしている可能性が示唆された。

(3) 保護者の期待

さざなみ教室(又は、さざなみ教室のような子どもの海辺の自然体験活動の指導・支援をしている地域や民間の組織)に期待することも、グループ間で大きな差があった(表10)。

Telacoya921 の子どもの保護者は、園にもさざなみ教室にも、自然体験活動に関する様々なことについて大きな期待を寄せていた。自然体験活動の大切さや意義を保護者がよく理解していることによると考えられる。さざなみ教室参加児の保護者は、「やりとげる体験」と「家庭では体験できないことが体験できる」に大きな期待を寄せていた。一方「新しい友達と仲良くなる」や「異年齢交流」にはあまり期待していなかった。マーケティング的な言い方をすると「自然や自然の生き物と仲良くなって友達になるように、(人間の)新しい友達や年齢の異なる友達とも仲良くなること(人間関係の成長)を謳っても、お客さんは集まらない」ということに(残念だが)なるのであろう。なお、自然科学の知識や理解を深めることへの期待は、子どもがまだ幼いので、さざなみ教室側の予想通り、低かった。しかし、子どもの海辺の自然体験活動で一番大切なこと、「海を楽しみ、海や自然の生き物を好きになること」に直接関係する「自然とのふれあい」「自然や自然の生き物に興味を持つ」への期待は、低いわけではないが、決して強く期待されてはいないのは、とても残念であると同時に、保護者への啓発活動(保護者への情報発信)の必要性が示唆された。幼稚園児の保護者は、園にとっても期待していることはほとんどなかった。幼稚園は、現在では一定の年齢になると通うことが前提(当たり前)のようになっていて、海辺の自然体験活動のような特別なプログラムへの参加や、Telacoya921 のような個性的な特徴を持つ園を選ぶ際のような特別な期待はないようである。幼稚園児の保護者とは異なり、保育園児の保護者は園に期待すること・しないことが明確に分かれていた。特に強く期待していることの一つは「家庭では体験できないことが体験できる」であった。これは本来の保育園の理念(家庭での保育と同じような保育環境を子どもに与える)に相反するもので、保育園の役割を理解していないというよりは、本来保育園に期待すべきでないことまで保育園に期待しているからであり、保育園以外に頼るところ、期待できるところがない、という切羽詰った状況の表れと思われる。また「初めて見るもの・初めて経験することを楽しむ」にも強い期待が寄せられており、保育園にも保育だけでなく教育機関としての役割が求められていることが分かる。日本では、幼保一元化は制度・行政上の問題でなかなか進まないが、現実には保護者達は、子どもが通う園に保育と教育の両方の機能を求めており、保護者のニーズに応えることを園だけに押し付けるのではなく、行政上の制度の工夫・改善が必要である。また、保育園児の保護者は教育機関としての役割も園に求めているが、決して何でもかんでも園に要求しているわけではない。自然とのふれあいなど自然に関することは園には期待していない。しかし、家庭でも、子どもと一緒に自然と触れ合ったり話したりする機会が少ないとなると、保育園児はどこで自然を好きになり、自然の生き物と友達になる機会を得るのであろうか。

(4) さざなみ教室参加児保護者の期待と満足度

子どもの海辺の自然体験活動で一番大切なこと、「海を楽しみ、海や自然の生き物を好きになること」に直接関係する「自然とのふれあい」「自然や自然の生き物に興味を持つ」への期待は、低いわけではないが、決して強く期待されてはおらず、満足度も、低いわけではないが、決して高い満足度を得られてもいない。子ども自身は、自然への興味・関心を持つてくれて、

一番大切なことをちゃんと受け取ってくれているので、結果オーライのようにになっているが、この一番大切なことに関する「保護者の期待と満足度」と「子ども自身が受け取ってくれたこと」の乖離をどうやって埋めていくかは今後の大きな課題である。

期待に比して満足度が低かったのは「やりとげる体験」であった。海にまだ慣れていないので十分に浅いところでも怖くて海に入れず、なかなか他の子のようにプログラムに参加できない、プログラムの途中で他に興味を引かれるものが出てきてしまって、やっていたことを放り出してそっちにいつってしまうなど、どれも幼児期には普通に見られる行動・反応である。同じプログラムに参加していても、子ども達の経験や感動、興味・関心は様々で、その個性や多様性が、その子の大切な体験となり思い出となるのであるが、保護者はついつい「ほら、頑張っ」と励ましながらか強制してしまったり、「そんなこと、しちゃダメよ」と制止してしまう。保護者には「温かく見守る、のんびり構えて待つ」・「ダメ出しをしない」練習が必要だと思われる。

それほど期待はしていなかったが満足度が他に比べて著しく低かったのは、「新しい友達と仲良くする」であった。これは、保護者に「他の保護者の方と仲良くなってください。そうすれば、お子さん同士も仲良しになりますよ。」というコメントを保護者に返したいと思う。

日本での子どもの海洋自然教育のパイオニアである故ジャック・モイヤーは、子ども達に海の楽しさ・海のすばらしさ・海の大切さを伝えたいという思いを持っていたが、子ども達に実際に望んだことは「海を好きになってほしい」ということであった。大切にすることや守ることを教え込むのではなく、子ども達が海を好きになって、自然に大切に思うようになり守りたいと思うようになるのを、子ども達と一緒に海での活動を楽しみながら見守っていた¹²⁾。原体験（その人の思想が固まる前の、生物や自然を五感で感じ取る経験で、以後の事物・事象の認識や思想形成に大きな影響を与える）¹⁷⁾の最適期は乳幼児期から小学校低学年といわれている¹⁸⁾。モイヤーのプログラムに参加したのは小学校高学年以上であり、その子ども達（モイヤーズ・チルドレン）は、大きくなって、今度は自分達が、海の楽しさ・素晴らしさ・大切さを伝えていこうとしている。もっと幼い幼児期から海辺の自然体験活動を経験した子ども達は、ガイアに生きる仲間である生き物たちとガイアを大切に思い守りたいという気持ちを、いっそう強く持ってくれることが期待される。幼児の海辺の体験活動で一番大切な「子どもが海を好きになり自然や生き物が好きになる」ことの実現にむけての課題は、保護者に、子どもに成長や学びを一方向的に期待するのではなく、保護者自身が子どもと一緒に海を楽しみ、海や自然の生き物を好きになり、驚きや感動、喜び（センス・オブ・ワンダー¹⁶⁾）を子どもと共有するようになってもらうこと、というのが本研究の結論であり提言である。

5. 謝辞

本研究は、NPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センターが、日本財団（2012年度助成金、事業名：未就学児の海辺の自然体験活動の教育的な検証と指導法の構築）の助成支援を受けて実施した事業の一環である。また、さざなみ教室は、オーシャンファミリーのスタッ

フとボランティア指導者、事務局の皆様によって実施され、研究データ収集に多大なる協力を頂きました。そして、アンケートに協力して下さった保護者のみなさまに心から感謝いたします。

参考文献

- 1) J. E. Lovelock: Gaia – A new look at life on earth, Oxford Univ. Press, Oxford, UK, pp.176, 1979.
- 2) 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議:我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画(ESD実施計画),平成18年3月30日決定・平成23年6月3日改訂, <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/keikaku.pdf>, (2013年5月23日:参照)
- 3) UNESCO: World Conference on Education for Sustainable Development, 持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議, (2013年6月12日:参照) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/08/_icsFiles/afiedfile/2012/08/21/1324704_01.pdf
- 4) 国土交通省:海洋基本法, (2013年5月23日:参照), http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha_07/01/010611_3/11.pdf
- 5) B&G財団:海洋教育事業 自然体験活動の効果に関する調査研究「海と出会い,自分と出会う～海洋体験活動が育むもの～」pp.20, 2010.
- 6) 文部科学省:小学校長期自然体験活動支援プロジェクト, (2013年6月12日:参照), http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/004/027.htm
- 7) 独立行政法人 国立青少年教育振興機構:平成22年度調査研究事業「青少年の自立に関する実態調査」報告書, pp.17, 2011.
- 8) 文部科学省:第10回教育再生懇談会 平成21年4月27日 配布資料13, http://www.kantei.go.jp/jp/shingi/kyouiku_kondan/kaisai/dai10/siryou13.pdf, (2012年5月23日:参照)
- 9) 文部科学省:新しい学習指導要領(平成22年), (2013年6月12日参照), http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/afiedfile/2011/07/26/1234786_1.pdf
- 10) 文部科学省:幼稚園教育要領, (2013年6月12日:参照), http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm
- 11) 保育所保育指針:厚生労働省, (2013年6月12日:参照), <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04a.pdf>
- 12) ジェーン・クドール, ジャック・T・モイヤー:森と海からの贈り物, TBSブリタニカ, 東京, pp.138-143, 2002.
- 13) ジャック・T・モイヤー, 海野義明, 中村泰之:子どもは海で元気になる, 早川書房, 東京, pp.218, 2001.
- 14) 岡部翠:幼児のための環境教育 スウェーデンからの贈り物「森のムツレ教室」, 新評社, 東京, pp.259, 2007.
- 15) 文部科学省:平成22年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果, 第2章.小学校 II.調査結果の特徴 4.家庭における「する」「見る(観る)」「話す」の効果, pp.53-54, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afiedfile/2010/12/16/1300266_12_1.pdf (2013年6月12日:参照)
- 16) Rachel Carson: The Sense of Wonder, Harper Collins Publishers, New York, pp.112, 1998.
- 17) 山田卓三:生物学から見た子育て, 裳華房, 東京, pp.121-127, 1992.
- 18) 体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会:少年期に必要な体験活動と指導のあり方—少年・少女が一人前になるための体験活動—, 国立信州高遠少年自然の家, pp.44-101, 2004.

Using a questionnaire survey to investigate parents' recognition and understanding of the most important objective of ocean and nature experience programs for early childhood

WATANABE Kanae, UNNO Yoshiaki

The most important objective of ocean and nature experience programs for early childhood is that children should appreciate the ocean, nature, and natural creatures. We administered a questionnaire survey twice to parents of children (1) enrolled in the program (Sazanami), (2) attending a kindergarten offering outdoor and nature activities, (3) attending a normal kindergarten and (4) attending a normal nursery school, and compared the differences in the responses to investigate whether there were any changes in children's attitudes towards nature and natural creatures and in parents' recognition and understanding of the objective. The results showed that the parents in the Sazanami group neither expected nor were very satisfied with "children's contact with nature" and "children's interest in nature and natural creatures." However, the children became interested in nature and natural creatures. The parents neither recognized nor understood what the most important objective of ocean and nature experience programs for early childhood was, but the children themselves did. We determined that if parents are to understand and realize the objective of ocean and nature experience programs for early childhood, they must appreciate the ocean, nature, and natural creatures with children, and to share children's sense of wonder and joy.

Keywords : Ocean and nature experience program, Early childhood, Sense of wonder
